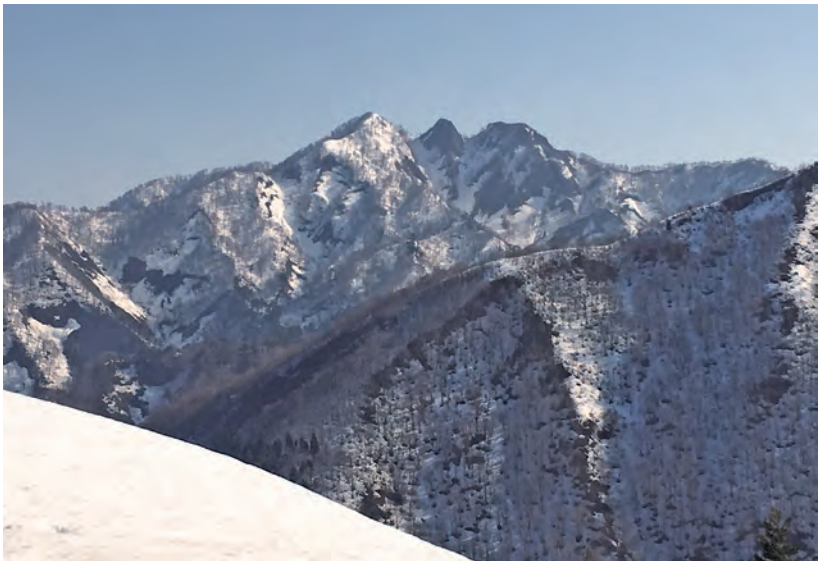
日本山岳会
越後支部報

第 41 号
令和６年10月15日
発　行　公益社団法人日本山岳会越後支部
発行者　後藤 正弘
新潟県上越市新光町２丁目１－40
TEL･FAX 025－512－7561
広報委員長　諏訪 惠一



私の一枚

2018年３月、村上市雷地区から新潟県の北の端っこを目指して県境沿いに歩いている途中で、山の字そのものの三つのピークが並んでいるのを目にしました。私にとっては初めて見る山容で写真を残しました。地形図で確認すると標高は700m程で摩耶山のほぼ南南西に位置しています。この名の知らぬ三つのピークに登ってみたいと思っていますが未だに実現できていません。

撮影者　知野　勇人

高頭祭と松明登山祭の歴史を回想

山崎　幸和

令和７年に創立１２０周年を迎える日本山岳会が記念事業の一環として、各支部が関与し全国13ヶ所に開催されている山岳祭を、先人の精神と登山の歴史を受け継いでいくことを目的にプロジェクト「引き継がれる山岳祭」を立ち上げた。

この先人は11人。上高地のウエストン祭を除く、邦人の全国最初の山岳祭は「高頭祭」で、その高頭仁兵衛翁の寿像碑は昭和25年７月２日越後支部が弥彦山頂に建立し、この日を第１回高頭祭と定めた。高頭翁はこの除幕竣工式直前の負傷事故で臨席叶わず、とうとう自身の寿像と対面できなかったという。

この４年後の29年７月13日の弥彦神社灯龍神事に弥彦山から松明行進が下った。赤々と炎を上げた約１２０本の松明が20時の花火打上げを合図に、山頂の高頭碑前から御神廟を一周して下山。神社から賑わう市中の行進は大勢の里人を驚かせた。この第１回松明登山祭の日に、２回目の高頭祭が実施された。翌30年からこの両行事は山頂の一体的行事として「新潟県登山祭」と称される。33年の第６回高頭祭はこの４月逝去された翁を偲ぶ追悼式となった。

昭和35年５月15日に高頭碑が今の大平山に移築され、二行事の開催日が分離する。越後支部は翌36年５月からロープウエー展望ビルでの毎年の総会に併せ高頭祭を計画したが、悪天で高頭祭の中止が続く。そこに39年の新潟大地震が起こり高頭祭の休止が更に続いた。

42年５月21日弥彦山麓在住の吉田と弥彦の支部会員らで細々と第10回高頭祭が再開された。越後支部から依頼され、開催は翁の誕生日５月20日直近の日曜を定例とし、設営は吉田在住会員が担当で毎年続いたが、先細り。更なる参加者の増加策、本部役員招聘などで48年から松明登山祭と同日開催の７月25日に変更した。しかし、25日の神社例祭日は平日が多く参加者の低迷は続く。平成年代になってようやく20名余の参加者が維持できる状況となり、次第に県内外の岳人にも認識され盛況感が出てきたのである。

随分と古い時代の些細な逸話などを記したが、これも平成５年『第40回記念弥彦山松明登山祭の栞』、平成19年『第50回高頭翁寿像碑前祭・写真でみる高頭祭のあゆみ』の記念冊子を編集した時、大事な創始の頃を知る人が少なくなり調査に大変苦労したことを思い出し「記憶は消えるが、記録は残る」を実感した当時を懐かしく回想にふけっていたからだった。

なぜなら、令和６年７月25日の高頭祭は67回、松明登山祭は69回を迎えるこの「引き継がれる越後の山岳祭」に予期せぬ吉報が届いたのである。それは２年前、日本で開催決定したアジア山岳連盟（加盟14ヶ国）創立30周年記念事業「国際山岳平和祭」の行事に、日本でもまれな弥彦山の伝統的登山祭に参加を、と白羽の矢が立ったという。そのため開催地は新潟県となり、中国、韓国、インド、イラン、カザフスタン、モンゴル、ネパール、台湾など海外から77名、国内からも１００余名の関係者大勢が弥彦山の両行事に参加された。海外の岳人には馴染みが薄い神道絡みの行事であったが大感激されていた。翌26日は長岡市で記念式典と祝賀会が開催され、各国の岳人は友好を深め合った。

弥彦山にこの行事が実現できたのは、先ず発案し関連団体を説得された神崎忠男ア岳連日本委員長、主催団体と県内関係団体との折衝に奔走された桐生恒治日本山岳会副会長、県内岳界の組織を取りまとめ協力体制を築かれた後藤正弘越後支部長、現場弥彦山での計画の実践に奮闘された小林頼雄弥彦山岳会長らの尽力が大きく挙げられる。他にも多くの協力者がおられたおかげで、山積していた難題が解決でき盛大かつ成功裡に終えることができたのであった。当日の高頭祭記念写真には、紅白横断幕で飾られた高頭翁寿像碑が多くの海外岳人を交えた２００人近い参加者の笑顔で囲まれている。未だかつて体験したことのないこの光景に、感動は止まらないのである。

高頭祭

小山　一夫

今年度の高頭祭はアジア山岳連盟創立30周年記念「アジア平和登山祭」２０２４のセレモニーとして、アジア山岳連盟加盟国と日本山岳・スポーツクライミング協会・日本勤労者山岳連盟・日本山岳会の約２００名と支部会員で総数２５０名以上の参加者で第67回高頭祭を開催しました。当日は朝から梅雨前線の影響で下での開催を検討しましたが、雨も上がり弥彦山頂よりの松明行進の中止を決定し、他の行事は予定どおり開催することとして、準備を始めました。

この日の為に数か月前から入念に準備し、数回の登山道整備や高頭碑広場の環境整備を重ねて当日を迎えました。

曇り空の強風の中で開催することになりましたが、アジア山岳連盟李仁禎会長・橋本しをり日本山岳会会長・蛭田伸一日本山岳・スポーツクライミング協会会長や本間芳之弥彦村村長など多くの来賓者をお迎えして開催することが出来ました。

今年は参加者の関係で記念講演は中止しましたが、無事終了することが出来ました。

献花

高頭翁は初期の日本山岳会の財政基盤を支え続けました。又日本山獄誌や本部の「山岳」編集に参加し、平ケ岳や苗場山を始め多くの越後の山を紹介しました。

生涯の恩師「大平晟」先生と初の登山の弥彦山で登山の洗礼を受け各地に足跡を残しました。

高頭碑は最初は弥彦山頂にありましたが、社務所建設の為に大平園地に移築しました。

始めの頃は高頭祭を開催し、松明を持ち、御神廟を一周し下山すると、松明の明かりが西蒲一体から見えたそうです。

樹木が大きくなり見えなくなりましたが、初代越後支部長藤島　玄氏や弥彦山岳会長　花井　馨氏や越後の岳人が開催した高頭祭・新潟県登山祭・松明登山の一連の行事は越後の岳人が誇れる山岳行事になりました。

アジア平和登山祭を開催し多くの参加者に感動を与えることができたと思います。

草刈りに登山道整備に開催の準備に、ご協力いただいた支部会員の皆様に感謝申し上げます。

後藤支部長挨拶

参加者全員で記念撮影

越後支部半纏頒布の経緯

吉田　理一

晩餐会や全国支部懇談会で越後支部の半纏を着用していると必ず制作のいきさつや費用を尋ねられる。お世話くださったのは長岡市の女性会員であることまでは思い出せるがその先はどうしても不明だった。古いファイルを整理していたら当時の案内文書が保存されていた。昭和63年９月28日付越後支部発行の「頒布のお知らせ」である。お世話くださったのは岩下香代子会員（９４１３番・１９９９年退会）。

北海道支部の行事に参加して同支部会員が着用していて好評だったことから越後支部に提案したのが発端であった。江戸火消し御用達の東京の業者に依頼した木綿の本染めとの解説文がある。頒布価格６８００円。

北海道支部の新妻元支部長ご夫妻が全国規模の行事に着用して参加されていたがここ十年以上同支部の半纏にはお目にかかっていない。

平成26年埼玉県秩父市での第30回全国支部懇談会で埼玉支部会員数名が「陸地測量部」の名入半纏を着て出席していた。地図に関する同好の士で作成したとのこと、製作費は１１０００円だったと話してくださった。陸地測量部は陸軍の測量部門であり現在の国土地理院の前身であるとのことであった。

本年５月神奈川県平塚市での全国支部懇談会で女性二人が半纏の袖をまくって見て「裏地の縫い付けがしっかりしている」と話していた。おそらく和裁の心得のあるお方であろう。

越後支部の印半纏は何着作られたのであろうか、36年経った今となっては知る由もない。

法被姿

地域の山

伝説と展望の山・丈ケ山（たけのやま）（５７１．６ｍ）

後藤　正弘

丈ケ山（たけのやま）は、信越トレイル黒倉山・鍋倉山の玄関口となる上越市板倉区寺野地区にあり、山麓には「猿供養寺（さるくようじ）」「東山寺（ひがしやまでら）」など、いかにも「ものがたり」を感じさせる集落名がある。

今から１３００年ほど前の養老２（７１８）年から天平末（７５９）にかけて、行基菩薩によって華園寺・乙宝寺・猿供養寺・

佛照寺・天福寺の五山が開かれたというが、開山に関して諸説あり定かではない。

しかし、古くから山岳仏教の道場として隆盛を極め、近郷近在にも関連寺や末寺が建立され「山寺五山」「山寺三千坊」と称されるような大本山であったと伝えられている。

隆盛を極めた山寺がなぜ衰退してしまったのかは、平氏の山岳仏教弾圧の余波を受け、治承３（１１７９）年に加賀（石川県）の国司藤原師高の軍勢に焼き討ちされたためとも、建仁元（１２０１）年に越後の城氏が鎌倉幕府に反抗して敗れ、そのときに山寺も城氏にくみしたとして兵火にあい壊滅したともいわれているが、はっきりしたことはわかっていない。

戦災で焼失後の応永年間（１３９４～１４２８）に再建されたのが現在の「山寺薬師堂」といわれている。応永２（１３９５）年７月２日、京の仏師筑後法眼の作、三善讃阿寄進の銘がある薬師如来坐像、釈迦如来坐像、阿弥陀如来座像が安置されている。

「丈ケ山」は登山道もなく荒れ果てていたが、平成18～21年「寺野の歴史を語る会」（現「丈ケ山ファンクラブ」）が登山道を開拓・整備した。

丈ケ山

登山口は山寺集落の最奥「山寺薬師駐車場」となる。ここに車を停め、すぐ近くの石段（２０９段）を登るか、林道をそのまま登り「延命清水」を経由して「山寺薬師堂」へ出てもよい。

堂の中にある「山寺薬師三尊像」を参り、七地蔵、日吉神社の三猿、風穴など見てから、古い墓地を通り抜け５分ほどで登山口に到着する。案内標石があるので間違えることはない。その前にまっすぐ進み「猿供養寺跡」を見て戻ろう。階段を登ると「二人の猿終焉の地」を経て山道を登る。

森の中を40分ほど登り切ると突然視界が開け、黒姫山、高妻山、妙高山、火打山から日本海まで一望できる。背後には、黒倉山・鍋倉山などの関田山脈が連なり、山頂には「身の丈地蔵」微笑んでいる。

ゆっくり展望を楽しんだら裏側の林道ルートから下山しよう。分岐に案内標石があるので見落とさないように下山しよう。50分ほどで延命清水に戻る。伝説などの詳細は「丈ケ山ファンクラブ」のホームページをご覧いただきたい。

丈ケ山山頂から

第37回全国支部懇談会に参加して

佐藤　博

５月25日～26日、神奈川県平塚市で全国支部懇談会が開催された。初日は、バスで平塚市と大磯町の境、標高約１８０ｍの湘南平に移動して、約１５０人が「第１回岡野金次郎碑前祭」に参加した。

岡野金次郎氏の生誕１５０年を機に開催された碑前祭には、平塚市長、日本山岳会会長のほか、岡野家のご子孫や小島烏水氏のご子孫などが集まり、同氏にまつわる話などが披露された。残念ながら富士山は見えなかったが、神奈川支部会員による素晴らしいフルート演奏で閉会となった。

懇親会は午後６時半から始まり10名ほどのテーブルには青森支部と福井支部の会員のほか神奈川支部の会員２人がテーブルマスターとして配置され各支部から持ち寄った銘酒を味わいながら遅くまで続いた。

二日目は、三浦アルプス縦走コース（健脚向き）に参加した。班ごとに分散して逗子駅まで電車で移動し、さらに京急バスで「風早橋」まで移動してから登山開始となった。総勢54名で６班編成だったが越後支部は静岡支部とともに「５班」で後方からのスタートだった。視界のない急登を登り仙元山で相模湾を眺めながら最初の休憩をとった。

岡野金次郎碑前祭

コースはネットなどで確認していたが、濃密な照葉樹林で視界が閉ざされ、細かく上下左右に曲がりくねる登山道はＧＰＳなどがないと現在地の確認も難しかった。また、タブノキの根が張りついた急登や背丈を越える笹の林を泳ぐように進むルートは気楽に山歩きを楽しむ雰囲気ではなかった。

下山後は、田ノ浦駅から帰路についたが、東京駅で買った缶ビールの栓を抜いたのは、空席が目立つようになった県境のトンネルの中だった。

懇親会込田支部長挨拶

上高地集会に参加して

志田　貴美子

７月に入会したばかり、右も左も分からない状態でしたが、８月９日の山行に空きが出たからとお誘いを受け、不安半分、期待半分で参加させて頂きました。

初日は鉢伏山と高ポッチ高原へ軽くハイキング。どちらも私は未踏でしたので楽し

みにしていました。鉢伏山は、駐車場から歩いて30分程で山頂です。二千弱の標高で、晴れていれば、大パノラマが広がっているのでしょうが、夏の白い雲に山々が覆われていました。でも、蓼科山や美ケ原などを見る事が出来ました。高原の爽やかな空気の中、昼食を取り身も心も満タンにして高ポッチ高原へ向かいました。移動の短い時間に、役員の方からストックの効果的な使い方を教わり、大変勉強になりました。

高ポッチ高原も歩いて10分程度で山頂へ到着涼しく車で気軽に来られるので、たくさんの観光客の人で賑わっていました。

黄色のマルバダケイブキが沢山咲いていて、緑の草原に美しく映えていました。夕方、上高地のカッパ橋を渡り、10分程歩いて、宿に着きました。別荘地の中にあり、レンガ作りのおしゃれな山小屋で、修学旅行に来たかのようでワクワクしました。

夕食は役員の皆様が準備して下さったご馳走が、テーブルに溢れんばかりに並び皆さん笑顔いっぱいの和やかな楽しい時間を過ごしました。

翌日は焼岳登山です。六時に宿を出て登山口まで30分弱歩きます。二班に分かれ各リーダーの元、安全第一でスタートです。避難小屋までは樹林帯が続き、時々ハシゴもあります。高度を上げていくと山頂部の荒々しい岩稜帯が見えてきて、百名山の迫力を感じます。空は、素晴らしい青空です。このまま、もってくれる事を願って、避難小屋到着。ここから全員が安全の為にヘルメットを借りて装着しました。

焼岳にて

下山時に、なんとTシャツ五百円と聞き、女性陣ほとんどの人が買われたのでは?。もちろん私も一番の記念のおみやげとなりました。

ここから山頂まではザレ場が続きます。足元に注意をしながら、全員無事に登頂しました。期待していた晴れも、一瞬でガスが沸いて真っ白の世界に。山の天気は仕方がありませんね、雨が降らないだけ良しですね。私も前に登った時は雨に降られてしまい展望は無かったので、今回は期待していたのですが、皆さんの笑顔で心は晴ればれでした。山の日の連休でしたが、焼岳方面はさほど混んでなくスムーズに下山することが出来ました。

無事バスターミナルに着くと役員の方から冷たい飲み物とおやつの差し入れがあり、渇き切った喉を一気に潤すことが出来ありがたかったです。

また、信濃支部の菅原さんには、二日間に渡り鉢伏山のガイドや車での荷物運搬や人の送迎など手伝って頂き本当にありがとうございました。

初日は名前も覚えられず話しかける事も出来ませんでしたが、帰りのバスでは楽しく会話も出来いろんな面で学ぶ事も多く私にとって大きな前進でした。

とても充実した二日間でした。ご一緒していただいた皆様に感謝申し上げます。

鉢伏山にて

環境保全活動とその意義

自然保護委員長　春日　良樹

越後支部では、従来より佐渡弥彦米山国定公園の秀峰弥彦山を中心に環境保全活動を進めてきた。登山道の草刈り、外来種フランスギク駆除、道標整備等である。さらに、環境省・上越森林管理署・妙高市環境会議で継続している妙高戸隠連山国立公園笹ヶ峰での特定外来生物オオハンゴンソウ駆除にも参加してきた。また、自然を慈しむ次世代を育てたいとの願いから、高頭仁兵衛翁ゆかりの深沢小学校登山学習への支援を続けてきた。

８月末、火打山でライチョウの採餌場植生の調査を行った。高校時代からライチョウや哺乳類、高山植生の調査などで70回程登っているが、半世紀の間に自然環境は大きく様変わりした。登山口の笹ヶ峰から山頂に至るまで、低地植物のオオバコが登山道沿いに繁茂し、標高２１００ｍの高谷池ヒュッテでは、オオバコのみならずスギナ、スズメノカタビラ、フキなどの低地植物、外来種のムラサキツメクサやセイヨウタンポポなども蔓延っている。標高２２００ｍ以上のライチョウ生息域では、ミヤマハンノキなどの低木林が分布を広げ、採餌場となるガンコウランやコケモモ等で構成される風衝草原はアザミ類やイワノガリヤス等が茂る高径草原に変わり、ライチョウの生息域が年々狭まっているように見える。さらに、テン、キツネ、カラスなどの天敵や高山植物を食い荒らすニホンジカやイノシシが、火打山山頂にも出没する。これらの変化の要因は、人間の活動によるものである。オオバコの種子を山頂にまで運んだのは、私たち登山者である。

国立・国定公園等を規定する自然公園法には、『我が国を代表する優れた自然の風景地を保護するとともに、その利用の増進を図ることにより、国民の保健、休養及び教化に資するとともに、生物の多様性の確保に寄与する』と記されている。日本の自然は、列島の地理的な位置や、縄文以来、日本人が自然に働きかけてきた結果成立したもので多様性と独自性に富む。昨今、インバウンド需要や観光資源としての利活用ばかりに目が向くが、「日本固有の自然景観や生物相を保護・保全し、次世代に引き継ぐ」ことが重視されなければならない。日本固有の自然が保持されなければ、観光立国など夢物語に終わる。

フランスギクの駆除であれ登山道の保全であれ、一朝一夕に結果が出るものではない。そうした取組を通して、皆で集い、日本の自然を再度見つめ直したり自然環境への関心を深めたりする機会となることを願っている。今ある自然をよりよい状態に保全し、登山文化と共に次世代に引き継い

環境保全活動の様子

でいくことが今ほど求められる時はないのだから。

春日山古道を歩く

後藤　正弘

春日山城址は、上杉謙信公の居城として知られ、複雑な自然の地形を巧みに利用した難攻不落の天下の名城であり、国の指定史跡だ。

４月６日（土）に「正善寺工房」を起点として、滝寺砦、宇津尾砦、トヤ峰砦、そして春日山城址を巡る古道を歩いた。

小学校跡地に建てられた「正善寺工房」に集合、「愛の風公園」を経て「滝寺砦」へ、日本海や米山、関田山脈の山並み、上越市街地が見渡せる。

南の尾根道から西へ折れて宇津尾集落へ。この集落は、三つの砦に囲まれた山合の村。明治時代以降26戸前後だったが、昭和30～40年代の高度成長期に高田地区への移住が増え住人はいない。しかし、町内会機能は今も維持されている。

八幡社日吉社合殿に立ち寄り、西の山道を登り林道へ出て宇津尾砦に向かう。宇津尾砦（２７４ｍ）は、薬師山頂上を砦の主郭とする山城で薬師如来を祀り、春日山城南方面を防備した重要な砦だ。

春日山城址にて

宇津尾砦から横清水を見て、トヤ峰砦へと向かう。下りが続くが最後に少し登るとトヤ峰砦（２１０ｍ）に到着する。眺望は抜群。春日山城から南西約２㎞に位置する。古道全体がカタクリロードとなっていて、疲れを和らげてくれる。

「正善寺工房」へ戻り、熊野神社入口から権現堂までは、急な山道を登り、その後尾根のアップダウンを繰り返す。広葉樹の森で気持ちの良いところだ。南三の丸まで観光客は少なく、静かな雰囲気のあるエリアである。

南三の丸から柿崎屋敷跡、景勝屋敷跡、大井戸などの観光名所が続き、春日山城址となる。観光客が急に多くなるが、本丸跡からは絶景が広がる。帰途は南三の丸から、中正善寺の白山神社を経由して「正善寺工房」へ戻った。

谷根「北山街道」を歩く

松井　潤次

柏崎市谷根から鯨波の薬師堂海岸を結ぶ約３㎞の峠道がある。最高点は薬師峠で谷根地域では「北山街道」の名称で古道として伝承されてきた。戦国時代には上杉謙信が通った謙信道といわれ、明治時代初期まで米山講や農作業の行き来に歩かれていたという。薬師峠を越える不便さもあってか明治23年に峠の中腹から鯨波まで手掘りの隧道が完成し峠越えはなくなったが、後に隧道も廃道となり人の往来も途絶えてしまった。

調査当日は晴天の中、鯨波薬師堂海岸側の下山口に車をデポし海岸沿いに国道８号線から県道２５７号線に入り谷根川に沿って谷根集落に向かう。集落入口の正平寺下の路肩に駐車する。道標などは見当たらないが北山街道の起点である。

簡易舗装された道を畑に沿って登る。農作業中の土地の方に聞いたところ昭和35年頃までは隧道が存在していたような話であった。舗装が途切れ道は杉林の中へ入る。道幅は２～３ｍ位で杉木立が続き、斜面に沿って登って行く。大きな石が現れると石仏と二十三夜塔が倒れたまま放置されている。

さらに登ると標高２００ｍほどの主尾根にでる。道幅のある落葉の敷き詰められた平坦な道は街道の趣が感じられ峠まで続く。ナラの木を中心とした木々の間から残雪の米山を垣間見ることができるが展望は効かない。突然、石仏と地蔵様があらわれた。米山薬師へ向かう当時の人々の信仰心が偲ばれる。ここが薬師峠で標高は２００ｍである。少し下りた平坦地は、かつての茶屋跡である。先は、しばらく平坦であるが、緩やかに下り始め主尾根から外れると一気に下る。倒木が目立ち歩きづらくなり、しばらく下ると沢に合流し、沢に沿った不明瞭な道は足元がぬかるみ杉の倒木や枝に阻まれてようやく進む。林を抜け林道へでると車のデポ地点に着いた。

北山街道を歩く

北山街道は10年ほど前に谷根地域で作られたウォーキングマップに自然と歴史が交差するみちとして「古道・北山街道」として選ばれている。谷根側は地域の方々の手が入って、峠までは道形も明瞭で比較的歩き易いが、鯨波側は手つかずの様子で荒れている。

調査日：令和６年４月７日
参加者：廣井博行、松井潤次、他１名

万治峠路踏査報告

遠藤　俊一

万治峠は阿賀町の実川集落と西会津をつなぐ峠で、万治元年（１６５８年）に開設された。その実川集落には宝暦９年（１７５９年）に建てられた五十嵐家住宅が現存、国指定重要文化財に指定されている。令和４年（２０２２年）の豪雨により大きな土砂崩れが発生し、この住宅は甚大な被害を受けた。

豪雨後の峠道の被災状況不明のなか、２０２４年４月26日下越地区古道調査リーダーの佐久間さんと馬取川荒沢集落から入山した。

馬取川荒沢集落を過ぎてまもなく道路は万治峠方向と会津の大出戸集落への二股に分かれる。万治峠方向には工事中の標識があるが、車で行ける所まで行く。馬取川沿いの林道は修復されていて災害の爪痕を感じることもなく順調に進んで行けたが、馬取川を横切る橋を過ぎたところで、急に状況は一変車が通れる状態ではなくなった。標高３９１ｍ地点のやや広い場所に車を置いて、徒歩で進むこととした。

道には所々倒木があったり雨に洗われた深い溝があったりで、令和４年の豪雨の爪痕の凄さがそのまま残っていた。歩くこと

20分で峠への山道となる。山道は、倒木はあるものの、峠へしっかりと踏まれた道が続いていた。

峠には古来往来した人々を見守って来たヒメコマツとアカマツの大木が存在感を示していた。アカマツの下には小川芋銭の「わするなよ万治峠のほととぎす」の句碑が建っている。

また、ヒメコマツの下には飯豊山と刻まれた供養塔が建っている。この飯豊山供養塔は飯豊山に登れなくなった農民の飯豊山信仰の拝所であった。

この塔の背後には大日岳の大きな山容が望まれた。飯豊山崇拝の格好の場所と思えた。この先実川への道は途中大きく崩落しており、古道調査はここまで来た道を引き返した。

供養塔から大日岳を拝む

調査日時　２０２４年４月26日（金）
メンバー　佐久間雅義　遠藤俊一

山行委員会活動の振返りと守門大岳登山

山行委員長　渡辺　茂

２０２４年度山行委員会の活動計画は残雪期の川内山塊五剣谷岳（テント泊一泊二日）やハクサンコザクラの群生や北アルプスはもとより、遠く南アルプス、富士山など大パノラマが堪能できる妙高連峰火打山（小屋泊一泊二日）を計画しましたが、残念ながら五剣谷岳の参加申込は１名、火打山はいつものメンバー５名でしたが、雨天のため、中止としました。

この残念な結果は「山」の選定に魅力がなかったのか、それとも泊山行は無理であったのか、また、７月25日は弥彦山での高頭祭の開催と大勢の会員が参加し、連続での登山は敬遠され、日程に問題がなかったか、いずれにしても今後の計画は日帰り山行にするべきであったのかと悩むところである。下期の計画では10月に魚沼市の未丈ケ岳を計画しておりますが、８月末現在10名の参加申し込みとなっています。

また、７月27日（土）に日本山岳会山行委員の守門大岳登山（日本山岳会５名、アルピニズムクラブ３名、越後支部山行委員３名の計11名）の案内をおこないました。

国際アジア山岳連盟30周年記念事業・第67回高頭祭、第69回弥彦山たいまつ登山祭に参加された日本山岳会の皆さんを守門大岳に案内しました。全員が守門山塊は初めてとのことで、「道の駅Ｒ２９０とちお」で合流し保久礼登山口に向かい、雨がいつ降るか心配しながら準備を整え、８時に登山を開始しました。

上部は濃いガスに包まれていたことから要所要所で守門岳について説明し、不動平からは大粒の雨となったが大岳山頂では雨は止んだものの周りはガスに覆われ、展望が効かないことから、景色や遠方の山々について説明し、想像してもらうことにしました。

守門大岳登山

雨が止み、のんびりと昼食を食べて下山開始。下山後は栃尾名物「油揚げ」の店へ案内をして全員が購入の後解散としました。参加者の皆さんから初めての守門であったことから喜びの声が届きました。

保久礼小屋前にて

事務局からのお知らせ

●支部会員動向（令和６年６月～９月）

１新入会員
志田　貴美子（会員番号１７３０９）
原　渉　（会員番号１７３１３）

２支部会員数（令和６年９月15日現在）
支部会員（準会員含む）１５０名
支部会友　８名

●支部会費の納入について

今年度の支部会費につきましては、大半の会員の皆様から納入していただいておりますが、８月末現在、一部の方が未納となっています。支部会費未納の方は早急に支部口座への振込をお願いします。なお、払込取扱票で振り込まれる際は必ず通信欄に住所、氏名を記入してください。（令和６年４月以降入会された支部会員は、今年度の支部会費は免除されますので、来年度以降から納入をお願いします。）

越後支部口座
金融機関：ゆうちょ銀行
加入者名：公益社団法人　日本山岳会越後支部
口座記号：００５６０－３
口座番号：１０３７１６
支部年会費：２，０００円
（会友は３，０００円）

●支部晩餐会の開催予定について

今年度の支部晩餐会を、12月14日（土）新潟市中央区弁天２－１－６、新潟東映ホテルにおいて開催予定ですので、皆さまのご参加をお待ちしております。正式な開催案内と出欠連絡方法につきましては、後日ご案内申し上げます。

事務局長　玉木大二朗

編集後記

今年の夏山シーズンは山での道迷いや疲労による行動不能での遭難、滑落事故などのニュースを見ない週はなかったのではないでしょうか。

道迷いはヤマップやジオグラフィカなどのスマホ・アプリの利活用で多くは防げるように思われます。

一方、疲労による行動不能については、原因は異なるものの初心者にもベテランにも当てはまるような気がします。

私は毎年春の黄金週に２０００ｍ弱の同じ山に同じルートで登り、体力の状態や老いの進み具合を確認して、その年に登る山選びの参考にしています。

いくつになっても山登りを安全に楽しむために、「彼（その山のグレーディング）を知り己（現在の体力、体調）を知れば百戦殆からず」を心に留めておきたいものです。

（諏訪惠一）